

祝・古稀林是幹先生

町 田 是 正

唐代の詩人杜甫は、曲江詩のなかで「人生七十古來稀ナリ」と謳いました。林先生、古稀の慶祝を心からおめでと
うと申しあげます。

先生には軍隊勤務が長く続きました。千葉県津田沼鉄道第二連隊に、或は昭和二十年の終戦に至るまで二回にわた
る応召があつて、約十年、遠くタイ国泰緬鉄道に苦斗されました。その間部下に慕われ、慈愛の中隊長として部下の
免倒をよくみられた。今も毎年欠かすことなく自坊の端場坊において、「林隊」なる戦友会が持たれ、三三五五に参
集した戦友は、先生を囲んで懐旧談で夜を明かしている。先生の人柄がしのばれる会合である。

千葉県津田沼鉄道連隊時代の先生と、奥様の愛子夫人との間にロマンスが生れた。若かりし愛子夫人が津田沼の連
隊に赴むかれ、先生を慰問されたお姿が何か目に浮かぶようです。然し、御夫妻のロマンスを語るとき、その後の戦
中・戦後の辛苦の幾星霜は人生ドラマである。先生の恩愛に接した私共にとって、耐えよ、そして誠実にと、生きた
教訓が強く示されている。

先生御夫妻には二人の御子息（是晋君・範夫君）がおられる。この御兄弟二人が小学校・中学校時代に、時として
飛びあがる程に大声で叱責されることがあつた。「父は打ち母は抱いて悲しめば……」と謳われますが、当に先生が

御子息に対するお姿は敵父であり慈父そのものであった。敵しさの中にも慈愛の涙がキラリとひかるものを私は再三見ている。慈愛の掌に抱かれて成長されていく兄弟お二人は幸せであった。

昭和五十四年十月二十五日、本学教職員一同は先生御夫妻を招待して古稀祝賀のパーティーを催した。偶々私が先生の経歴を参会の諸賢に紹介することになったが、その中で先生御自身の言葉をメモしてそのまま披露した。「私は戦場に赴き、また祖山に在っては日常の事務に忙殺されて遂に学者たり得ず、又優れた宗家たり得ず、わずかに挙ぐるる点ありとせば、境遇の然らしむる処身延の歴史を語り継ぐ所謂「語り部」的存在か」と。先生の心情がにじみ出ているコトバですが、やや謙遜の感がいたします。身近に接している私にとって、先生の歩かれた足跡は大きくまた指針がそこにあるようです。

先生の祖父に当る太田日定上人は、祖山八十三世望月日謙法主時代の執事を務め、また師範の本行坊下里是察上人も日謙法主代の会計執事として敏腕をふるった。林先生には、祖父・御師範と同様に久遠寺の経理・庶務の各部長を歴任されるのであるが、特に藤井日静院下が八十六世の法灯に瑞世されるや、総務に望月日雄上人（後八十七世法主）、庶務部長に竹下真孝上人（現総務）、布教部長に岩間湛良上人（現任）を、そして経理部長の要職に林是幹先生が就任された。いま私は「要職」に就いたと書いた。文字通り要職であったのです。当時人も知るごとく久遠寺は莫大な借財をかかえていた。その返済と健全財政への再建のために、望月・竹下・岩間の各上人の協力の下に、先生御自身は不眠不休、まさに骨身を削る労苦が続くのである。美事数年にして財政再建を成就し、今日の久遠寺発展の財政基盤を確立され、藤井日静法主の期待に報いたのである。先生はこの間の辛苦について一言も他に漏らした事はない。いま過ぎし辛苦の日々を顧りみて、先生を知る一人として先生に代って筆を染めておきたい。

先生は本学園にも教鞭とること永く、多くの子弟の教養に尽粹され、また身延山教学の振興・とくに身延文庫の資料保存と整理に意を尽された。昭和四十八年宗祖御入山七百年記念事業、久遠寺編「身延山史」の刊行に当り、その資料の大半は林先生の保存せるものであった。

先生は日蓮宗宗会議員二期、身延町教育委員を勤め、宗門より一級法功賞、昭和四十六年立正大学より望月学術賞、四十八年司法保護司として藍綬褒章などを授与されているが、余り口にした事がない。現在、先生には久遠寺の山務を離れて本学園の子弟教養に専ら当られる日々である。時としてジョークをとばして学園の女子事務職員を爆笑に誘うユーモアのある先生である。

往昔、中国では人生七十年古来稀なりと云ったが、いまや人生七十年は壮年の時代です。先生には愈々御健勝に、後に続く若い私達、そして宗門子弟の教養に御尽力ください。「是の字」に繋がる法縁法孫の末輩の一人、ひたすら先生並に奥様の御多幸をお祈りしつつ、古稀の献辞に代えます。

(昭和54、10、30)